

---

日付: 2007-09-07 タイトル: 第6研究委員会入会案内2007

第6研究委員会は、障害のある人が主体的に生きていけるような支援のあり方を「ライフサイクル」に視点をおいて研究しています。「ライフサイクル」ということだけでも研究の対象となる領域は大変広いのですが、私たちが大切にしているのは「当事者と一緒に研究する」という姿勢です。障害のある人そしてその家族の方々は、本人が生まれてから数多くの専門機関、専門職とのかかわりを避けられません(このことは意外にもあまり注目されていません)。病院では医者や看護師、保健福祉センター等では保健師や心理士、療育機関ではOTやPT、ST、保育士、指導員、学校では先生、これに加え福祉事務所のケースワーカーなど… 数えあげればキリがありません。しかもこれらの専門職はライフサイクルのごく限られた期間にしか関わりをもちません。障害のある人・家族の方の中には、専門職に言われたたった一言に長い時間傷つき苦しんだり、あるいは支えられたり報われた思いを感じる事が分かっています。このように一瞬の一言、短期間の出来事が深く胸に刻み込まれることもあれば、長期間の積み重ねによってじっくり形成されるもの(自分の思いを大切にされる環境・関係が安定していることによって“自分らしさ”が培われます)、あるいは失われてしまうものがあります(本人の主体性を無視した厳しい訓練が長期間続くと“自分らしさ”から遠ざかっていきます)。これが意味するものを、私たちは深く考えなければならぬと思います。そしてそのためには本人・家族の「これまで」「いま」「これから」の思いに接近していかなくてはなりません。だからこそ、当事者と一緒に研究する、ということが必要になってくるのです。私たちはこれまで、「母親100人に聞きました」と題して、全国規模のアンケートを実施し、幼児期、学齢期、成人期の各時期に受けた様々な助言・指導・サービス等に対する、異なる世代のお母さん方の率直な声をまとめました(これらの成果は研究報告書やブックレットとしてまとめられています)。また父親やきょうだいの立場の方とのシンポジウムや、教育分野・福祉分野の関係者と当事者のシンポジウム、「関係発達」の視点についての講演会などを開催してきました。このようにして様々な角度からライフサイクルを通じた支援の必要性を確認してきました。もう一つ、私たちは「主体性」という言葉を真正面から論じていきたいと考えています。主体性がはぐまれるような支援はどうあるべきか、また主体性が押しつぶされた人が回復する支援とは何かを考えていきます。時に、自傷や他害といった行動障害、また感覚の過敏や独特の感じ方からくる「分かりにくい行動」をする人がいます。本人や家族からお話をじっくり伺うと、ライフサイクルのある時期に、主体性を押しつぶされてきたことが分かる場合があります。そして、本人の思いが周りから大切にされていくにつれ、こうした行動が和らいでいくことがあります。この過程が意味することを研究していきたいと思います。現在、わが国の福祉制度は大波に揺られ、しかも本人の主体性をはぐむような力強さはありません。だからこそ私たちは制度論に振り回されることなく、いつも「本人・家族」と自分たちの「今・ここ」に目を向けていきたいと思います。様々な立場の方々のご参加をお待ちしております。

---

Copyright © NPO法人全国障害者生活支援研究会 All Right Reserved